

風景構成法の彩色過程における心理療法的側面について

—やりとりの視点から—

清重 英矩

1. はじめに

風景構成法（Landscape Montage Technique ; LMT）とは、精神科医である中井久夫によって創案された芸術療法の一技法である。当初、中井は統合失調症患者に対する箱庭療法の可否を判断する予備テストとして風景構成法を考案したが、のちに予備テストとしての役割ではなく、その独自の治療的意義が認められるようになり発展し、現在ではさまざまな心理臨床領域で用いられている。

風景構成法の施行法を示すと以下のようなになる。描き手¹は「川」から始まる 10 のアイテム（川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石や岩のようなもの）を、見守り手²によって枠付けされた画用紙に、逐次提示されるそばから一つの風景として描き入れていき、その後「足りないと思うもの」を付け加え、その素描された風景に彩色を施すことによって、一つの風景を完成させる。描画後には PDI（Post Drawing Interrogation）と呼ばれる見守り手からの質問を介して言語的なやりとりが行われることもある。

風景構成法という技法は、考案当初から現在に至るまで心理臨床場面で多く用いられている技法の一つであり、「心象風景」という日本人に馴染みの深い言葉とともに日本の心理臨床に根付いている。そして、その用いられ方の多くは、描き手の状態像を理解するためアセスメントの側面を強調するものや、風景を介して描き手と見守り手が関わり合うという心理療法的な側面を強調するものである。そして、それらの中でも、風景構成法の場合における心理療法的な側面が注目され、これまで研究と実践が行われている。

本論文では、その風景構成法の心理療法的な側面に関してこれまでの記述をまとめつつ、その鍵となる概念である、やりとり（interaction）に着目する。そして風景構成法プロセス全体におけるやりとりの特徴を示すことによって、主にこれまであまり注目されてこなかった彩色過程におけるやりとりに焦点を当て、その心理療法的な側面についての検討を試みたい。

2. 風景構成法の心理療法的側面について

まず、風景構成法に関するこれまでの記述を振り返りながらその心理療法的な側面についてまとめていくことにする。風景構成法の用法として松井（1996）は「診断的用法」、「治療的

¹本論文ではクライアントや患者などにあたる風景を描く者のことを“描き手”と呼ぶこととする。

²本論文ではセラピストや治療者などにあたる施行者のことを“見守り手”と呼ぶこととする。

法」,「治療者の“自己治療”」の3つをあげている。「診断的用法」はアセスメントとして用いることを意味しており,風景構成法によって表現された風景を通して描き手を理解しようとするものである。「治療的用法」は描き手が風景を描くことを通して,自己表現や自己治癒力を賦活させることにつながるものである。また,「治療者の“自己治療”」は,風景構成法を通して描き手の健康的な側面への気づきがもたらされ,見守り手の治療に対する動因を高める働きのことである。角野(2004)は描画療法の治療的意義として,見守り手である治療者が描き手である患者の描画する過程を見守ることで治療的共感が生み出されること,描き手と見守り手との間で生み出された中間的な存在である描画を描き手の内的世界が表現されたものとして客観的に観察できること,描くことそのものが描き手である患者の自己治癒力を賦活することなどを挙げ,これらは風景構成法においても同様であるとする。そして,中でも自己治癒力の賦活について,風景構成法の素描過程において述べられるアイテムの象徴性に重点を置いている。また,伊集院(2013)は自己治癒的な側面について,風景を描くことが「項目間の関連表象ⁱⁱⁱを一つ一つさりげなく導く」ことであり,「患者自ら距離をおいて見ることで,それを補正することができる」と述べ,別々に教示されるアイテム同士を一つの風景にまとめあげることが自己治癒的なイメージや表象機能の回復を目指すことになっているとする。つまり,風景構成法の「構成」という機能に「関連表象」の回復を導く作用があり,その点が心理療法的な側面の一部を担っていると考えている。このように,風景構成法は“風景を描く”ということが心理療法的な側面を大きく担っていることが指摘されてきたと言える。

上記とは別に,河合(1984)は風景構成法に関して,「非常にうまく自我を通して,相当深いところまで,お互いにやりとりができる方法であり,描いていること自体が相当な治療的行為になっているのではないかと述べ,描き手と見守り手の間に描画を介した相互の交流がなされるという点にも風景構成法独自の治療的意義を認めている。この点について,皆藤(1998)は「やりとり(interaction)」として取り上げ,「関係性を基盤とした描画作業における『やりとり』に心理療法師がいかにコミットするか,それによっていかにイメージの深層へと下降するかによる」と,その心理療法的な側面が機能する鍵として,描き手と見守り手との間で織りなされるやりとりの重要性を指摘している。そして,古川(2015)は風景構成法について“中井に還る”ことをテーマに,その基本理念からやりとりという点に着目し,描き手,見守り手,風景の三者関係におけるやりとりが風景構成法の心理療法的な側面を担っているとする。

以上,風景構成法の心理療法的な側面については,風景を描くことによって自己治癒力が賦活されるということと,描き手と見守り手の関係において風景が描かれるということの二つが大きくは挙げられていると言える。この点は中井(1996)が風景構成法の最大の診断的価値を「できるかできないか」であるとしており,それが提示された項目を一つの風景として構成できるかどうかのみならず,描き手と見守り手の関係における交流を通して「完遂できるか」という意味を含み,「必ずしも普通の意味において絵が描けないということではない」としていることにも表れているだろう。そして,風景構成法において描かれた作品が描き手と見守り手の関係におけるやりとりを経たものであるということを考えると両者は分かち難く複雑に絡み合

ⁱⁱⁱ関連表象は「原点にある心像から切り出されたそれぞれの感覚像に関連をつけ,一連の文脈を構成する表象過程」のことを指す(伊集院,2013)。

っている。そして、風景構成法の場合において、描き手と見守り手の関係が基盤としてある点で、やりとりという観点はきわめて重要な視点であると言える。したがって、本論文ではこのやりとりという点に着目することとし、次にそれがこれまでどのように考えられてきたのかについてまとめることとする。

3. 風景構成法におけるやりとり

風景構成法におけるやりとりについてこれまでの記述を概観しつつ検討していきたい。

風景構成法は、その創案者である中井の臨床哲学に基づいている。中井（1984b）は、「精神病理学は、分裂病者の言語がいかにか歪められているかを記述してきた。おそらく、それが真の問題なのではない。真の問題の立て方は、分裂病の世界において言語がいかにか可能であるか、であろう」と述べ言語的交流が困難な統合失調症患者に対して、言語の歪みの特徴を示すことが重要なのではなく、その言語のない世界にいる者たちとの間に、どのようにして相互に交流する可能性があるのか、つまり患者の治療的に開かれた部分を探ることの重要性を指摘している。このように、風景構成法は中井が統合失調症者との心理的接近の可能性を探っていたことを背景として創案されているが、これまでこの点についてはそれほど指摘されて来なかった（古川, 2015）。しかし、上記の点からも、風景構成法におけるやりとりという視点はきわめて重要であり、この点に留意しつつ今後もさらなる研究と実践を進めていくことが求められる。

そして、風景構成法に限らず心理臨床場面で用いられる描画は、描き手と見守り手におけるやりとりが重要な視点となる。皆藤（1998）は風景構成法導入に対する拒否を巡ってクライアントとの間で交わされたやりとりについて述べ、風景構成法を行おうとした見守り手に対して、描き手が枠付けされた画用紙を見て拒否の姿勢を示した事例を取り上げている。そして、その拒否は見守り手の姿勢に対する異議としての動きであると考察されている。この際、描き手と見守り手の間に交わされたやりとりについて、「枠付けを行おうとする筆者の動きがクライアントのところに『反映』されてクライアントのことが生まれ、そのクライアントのことが筆者のところに『反映』されて筆者のことが生まれるという、関係性を基盤とした相互交流が描画という場に存在する」ことが枠の体験を、表現を強制するものから保護するものへと変容させ、描画空間自体が創造的なものへと変容したことを意味深いとする。こうした描画空間を創造的なものへと変容させていくやりとりの中で「描画が関係性をイメージの深層へと下降させる機能」が働く。そして、この点が心理療法のなかで描画を用いる際に重要な点であることが述べられている。厳密に言えば、ここで取り上げられた事例は風景構成法で生じるやりとりではないが、風景構成法の場合において、描き手と見守り手の関係におけるやりとりがきわめて重要であることが示されていると言える。

さらに、風景構成法の読み取りにおける誘目性（皆藤, 1994）という視点との関連の中で、皆藤（1998）は、項目の逐次提示と描画を繰り返す中で、描き手は各項目に対してイメージや意味を込めて行くことを指摘し、「作品は、クライアントと心理療法家双方のイメージや意味の交錯によってもたらされた『意味付与』の産物であり、イメージの産物である。言い換えれば『やりとり』によって織り成された風景である」とする。そして、プロセスのなかで「心理療法家のところのざわめきが生じることがある。そのとき、クライアントと心理療法家のイメー

ジが交錯するトポス、両者のこころの波長が絡まり合うトポスが現出する」として、描き手と見守り手との間において、「イメージや意味の交錯」が生じることの重要性を指摘し、ここでもそれを生じさせる基盤としてやりとりが重要であることが指摘されている。

このように、風景構成法を巡ってなされるやりとりは心理臨床場面において重要であり、それが心理療法的な側面の一つを担っている。そして、そのやりとりの様相は、場をともにする描き手、見守り手、風景（画用紙）の三者の構造的特徴として示されている。皆藤（1994）は、箱庭療法との比較を通して、風景構成法におけるやりとりの特徴を述べている（図 1^{iv}）。そして、風景構成法のやりとりの特徴として、描き手、見守り手、風景の三者関係における反応が循環し、交互交流して風景が描かれていくことを挙げ、描き手と見守り手の間においては、意識の水準での言語を介したやりとりがあることを最大の特徴の一つとして考えている。

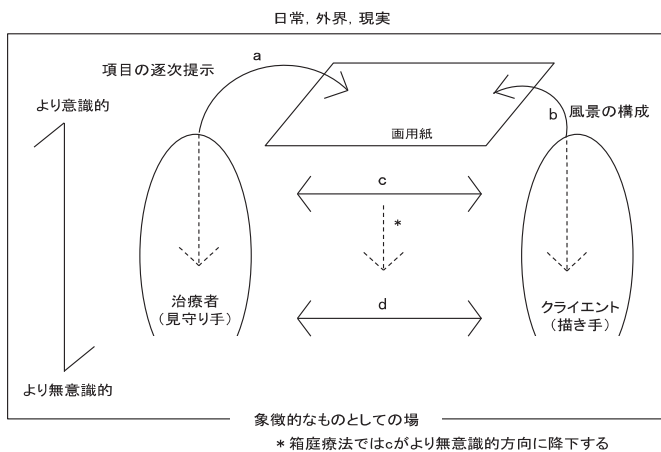


図1 治療関係における風景構成法の機能 [皆藤（1994）より一部改変]

また、古川（2015）は図1を改変しつつ、風景構成法、特に素描過程におけるやりとりについて詳細な検討を行なっている（図2^v）。そして、風景構成法の素描過程における項目の逐次提示→描画というやりとりについて、中井（1985）の「毒を微量投与する」という観点を参考にしつつ、ことばの重要性を指摘し、そうした自我的な水準に守られたやりとりを基盤として「自身の深み」へと向かう方向性があり、それらが複雑に絡み合いながら風景が描かれて行くことに風景構成法の特徴があると述べている。しかし、古川（2015）は図2について、「もちろんこれは、逐次項目提示の際の図式であり、風景構成法のプロセスの中では、導入時の枠づけの時にはまた異なる構造になることが考えられるし、あるいは彩色の時や、描画後のPDIの時にはまた異なる構造になると考えられる」と指摘するように、風景構成法はそのプロセスに異なる過程を内在しており、各過程におけるやりとりの構造的特徴は異なっていると考えられる。

iv a…見守り手と風景の関係。見守り手が画用紙に枠づけし描き手に渡す動き、画用紙に描かれる項目や描き手の描画活動から見守り手が受ける意識的、無意識的反応。b…描き手の描画活動の総体と、刻々と描かれてゆく風景から描き手が受ける意識的、無意識的反応。c…見守り手による項目提示と、それに対して見守り手に向けられた描き手の反応。いずれも意識的水準で行われる。d…基本的安定感に支えられた関係。（皆藤，1994）

v 実線は現象的に観察可能なレベルでの行動を、点線は内的な動きを示している（古川，2015）。

そこで、次に風景構成法におけるプロセスについて取り上げ、そのやりとりの特徴について検討することとする。

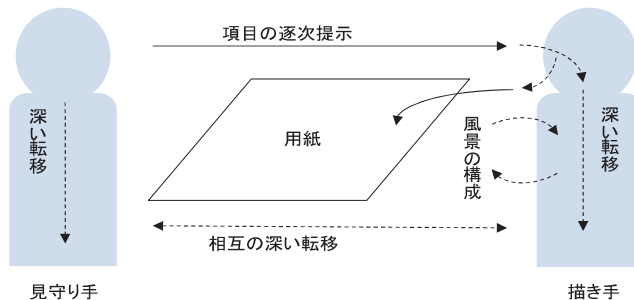


図2 風景構成法における非対称性を加味した構造的特徴(古川, 2015)

4. 風景構成法のプロセスにおけるやりとり

風景構成法における特徴の一つにそのプロセスがある。見守り手によって教示され、枠付けされた画用紙を手渡され、「川」に始まる10のアイテムを言われるそばから描き入れ、付加物を加えて一応の風景を描いていく。その後、色を塗るように教示され、彩色することで風景を完成させる。そして、見守り手からの質問に対して答える形で話し合いが行われる。そして、この大別された4つの過程すべてが風景構成法のプロセス全体を成している。皆藤(1988)は風景構成法の一つの事例をもとにそのプロセスを提示する中で、風景構成法描画の読み取りや描き手の理解を深めようとする当時としては数少ない試みを行い、プロセスを踏まえつつ風景構成法を考えることの重要性を指摘する。また、岸本(2013)は風景構成法のプロセス性の重要性を「ストーリー性」という概念を用いて指摘し、風景構成法によって描かれた作品から描き手を理解するための王道として、その描かれるプロセスを含めた理解を重要視している。

ところで、これまでの風景構成法に関するプロセスを扱った研究や論考に関しては、「作品理解への繋がり」に重点を置くものと、「プロセス自体の検討に重点を置くもの」に二分されるのではないかと筆者は考える。そして、「構成プロセス(皆藤, 1994)」や「ストーリー性(岸本, 2013)」は前者の立場をとることになる。それは臨床場面では当然のこととして行われることであると思われるが、描き手と見守り手とが風景が出来上がるまでに共にした過程を、後から作品を見ながらプロセスを再生し追体験することによって、描き手の理解を深めることを試みる視点であり非常に意味深い。

一方、後者は風景構成法の過程を共にするその時の生の体験をもとに、プロセスにおいて生じることについて検討するものである。描き手、見守り手双方の風景構成法における生の体験を語りという形で取り上げた皆藤・中桐(2004)や、二度にわたる描き手としての体験を語りとして提示し検討している村松(2004)などは、そのプロセスにおいて生じていることを検討する上で非常に示唆に富む。また、調査研究としては他の描画法との対比という形ではあるものの風景構成法の描画過程における主観的体験について検討したものもある(近藤, 2016)。こうして風景構成法プロセスそのものにおいて描き手や見守り手双方がどのようなことを体験しているのかについて検討することは、風景構成法における心理療法的側面を機能させる鍵となるやりとりの様相に関して貴重な示唆をあたえてくれるものであると言える。

無論、「作品理解に重点を置くもの」と「プロセス自体の検討に重点を置くもの」の両者は明確に分けられるわけではなく、前者の中には後者の部分が含まれており、その逆もありうる。ただし、それらは心理臨床場面における風景構成法の基盤を支える重要な点であり、根本的には軌を一にするものであると言えるだろう。したがって、風景構成法プロセスで生じていることに重点を置き検討することは、風景構成法の基盤を支えるものとなると言える。したがって、風景構成法全体のプロセスの中におけるやりとりの特徴というものを捉えていくことが必要となってくる。以上の点から、風景構成法のやりとりに着目して、プロセスをまとめると以下のようになる（表1）。

表1 風景構成法の過程とやりとりの様相 [中井（1984a）を参考に筆者作成]

風景構成法 Landscape Montage Technique	やりとりの様相
(1) 枠づけ過程 画用紙を提出し、枠どりをしてから、「今から私が言うものを、一つ一つ唱えるそばからこの枠の中に描き込んで、全体として一つの風景になるようにしてください。」と告げ、サインペンを手渡す。 (2) 素描過程 (1) 川 } (2) 山 } 大景群 (3) 田 } (4) 道 } (5) 家 } (6) 木 } 中景群 (7) 人 } (8) 花 } (9) 動物 } 近景群 (10) 石 } (11) 足りないと思うもの。 (3) 彩色過程 クレパスや色鉛筆などを用いて彩色・完成させる。 (4) 話し合い過程 必要な質問（季節・時刻・天候・川の流れの方向、人と家、田などの関係、人は何をしているかなど）、連想、支持など。	見守り手がことばで教示を行い、描き手がそれを聞く。見守り手が画用紙やサインペンを手渡し、描き手がそれを受け取る。 見守り手がことばで逐次提示を行い、そのたびに描き手が画用紙に描き入れることが繰り返される。 見守り手は基本ことばを発せずに見守る。描き手は作品に彩色する。 見守り手がことばで質問し、描き手もことばで答える。

ここで、風景構成法において重要とされることばによるやりとりという点に着目すると彩色過程において他の過程とはその様相が異なる。他の過程では、教示や質問などのことばによるやりとりが存在する。枠付けでは、見守り手は描き手に見られる自分を感じつつことばによって教示を行い、枠づけした画用紙を描き手に手渡し、さらにサインペンも手渡す。描き手は教示を聞き、見守り手が教示をしながら枠付けをするところを見る。そして、画用紙やサインペンを受け取る。素描過程では、描き手は見守り手がことばによって逐次提示する項目について、そこから想起される各項目のイメージに基づいて画用紙にサインペンで描き入れることを繰り返しながら、風景を構成していく。PDI では描き手は見守り手の質問から連想される描画中の体験、あるいは各項目や風景そのもののイメージから連想される内容についてことばで答えてやりとりを行う。

一方、彩色過程では、描き手は最初に見守り手から色を塗るよう言われた他は、基本的には

ことばを発することなく風景に色を塗っていく。そして、見守り手はその場において描き手が彩色するのを基本的には描き手と同様にことばを発せずにそばで見守る。したがって、彩色過程においてはことばによるやりとりはなくなり、「交流は背景化する（皆藤，1994）」ことになる。

このように、風景構成法プロセス全体について、やりとりの構造的特徴という観点から見ていくと、彩色過程において構造的な変化が生じるということが、風景構成法の一つの特徴であると言えるだろう。そして、素描過程におけることばを介したやりとりが幾度となく繰り返されることが風景構成法の特徴であることやその他の過程においてもことばが重要視されている点を踏まえると、全体のプロセスの中で彩色過程は特異な過程であるということになる。そこで、今後はこのような構造的な変化が生じる彩色過程に注目して論を進めたい。

5. 風景構成法における彩色過程の特徴

中井（1996）は彩色過程について「いちおう構成された『風景』を修正し、情動づけ、混沌を最終的に追放する機会である」とし、皆藤（1994）は素描された風景および描き手自身に「感情、情動を吹き込み生命を与えてゆく作業」であるとする。これらの記述からは、松井（2009a）も指摘するように、風景構成法の彩色過程には生命感や情動を与える作業だけではなく、“構成”という要素が含まれているということができる（清重，2015）。

そして、これまでの彩色過程に関する研究を概観すると、そもそも彩色過程に重きを置いたものは少ない（松井，2009b）。その理由の一つは、風景構成法は“構成”という要素が技法の中心であるために、項目をいかに配置したり関連付けたりして描き入れるかという点が注目され、素描過程を中心として研究と実践が進められて来たことにある。その代表として構成型（高石，1996）や構成プロセス（皆藤，1994）などの臨床場面においても有用な視点が生み出されている。また、風景構成法のプロセスにおける体験の検討についても、彩色過程には焦点が当てられにくいという現状もあるが、この点は彩色過程が素描過程のようにアイテムの順を追って体験を振り返ることができないことに調査研究が困難な理由の一つがあると言えるだろう。

このような現状の中で、少ないながらも彩色に重きをおいてなされた研究としては以下のものがある。運上・橘・長谷川・中村（2010）は風景構成法の彩色に関する感情体験について自由記述を用いて調査を行い、その感想を肯定的、否定的、中立的の3つに分類することによって彩色過程では肯定的感想を持ちやすいことを示している。また、松井（2009b）は彩色過程における表現に着目して論考を行い、「混色」や「塗り残し」に関して重要な示唆を与える。しかし、これらは彩色過程を経ることによって描き手と風景との間において生じることを検討したものであり、風景構成法プロセス全体を踏まえた彩色過程におけるやりとりの可能性に対する検討としては不十分と言わざるを得ない。

ここで、やりとりという観点から風景構成法の彩色過程における描き手、見守り手、風景の三者関係における構造的特徴に注目する。皆藤（2004）は「彩色は、クライアントと風景の関係および心理臨床のトパスが主体となって進んでいくプロセス」であるとする。すなわち、彩色過程においてはことばによるやりとりはなくなり、描き手と風景との描画活動を中心とした交流が主体となって進む。見守り手を含めたやりとりの構造的特徴としては箱庭療法のそれに近いものとなり、ことばや動作による明確なやりとりはそこに存在しないことになる。しかし、

古川 (2015) が「彩色過程においても必ずしもやりとりがないというわけではない。」とするように、三者関係における交流の可能性は存在していると言えるだろう。

ところで、風景構成法において、これを介した意識的・無意識的反応による交流は、全体として心理療法的な機能を有しているが、ここまで用いてきた「やりとり」という語は、ことばやそれに対する描画活動といった明確なものを介した意識的・無意識的反応による交流のうち、より意識的側面に比重の置かれたものであるように思われる。ところが、彩色過程においてはそうした明確なものを介したより意識的な交流が背景化する点に特徴があり、そこで生じる交流はより無意識的な側面に比重が置かれるように思われる。そこで本論文では、彩色過程における描き手、見守り手、風景の三者関係における交流を指す語として、他の過程と区別して「相互交流 (mutual process^{vi})」という語を用いることとする。

次に風景構成法のプロセスにおけるやりとりの構造的な変化による影響も考慮しつつ、「相互交流」という観点から彩色過程における心理療法的側面の可能性についての検討を試みたい。

6. 「相互交流」から見た彩色過程の心理療法的側面の可能性

彩色過程においては、描き手と風景の関係が強まり、そこでの描画活動を通した相互交流が主体となる。風景に彩色が施されて行く際、描き手と風景との間においては、色を塗るという行為そのものや、見守り手からのことばがなく彩色する順番も描き手に任せられていることが、描き手にある種の自由を与え、描き手が風景に没入する感覚を生みやすい構造となっていると言える。そうした中で、素描過程において賦活されていた風景や各項目のイメージと、色を塗るという行為を通して相互交流を行うことになる。そこでは、彩色された色とイメージしている色との一致や不一致、葛藤などを感じながら再び彩色へと向かうことが繰り返され、同時に素描された風景や各項目のイメージをより明確化して表現する (松井, 2009a)。そうして、彩色されていく風景に生命感や情動が込められて行くことになる。このように、描き手と風景の間に内的な相互交流が生じており、“構成”という心理療法的要素を帯びつつ、イメージによる自己治癒力の賦活という心理療法的側面をも担っていると考えられる。見守り手と風景との間においても、描き手と風景との間において生じることと同様に、彩色されて行くプロセスにおいて、情動やさまざまな連想が喚起させられ、絶えず相互交流が生じていると思われる。

ここで、描き手と風景との関係が主体となって進む彩色過程において、描き手と見守り手と風景の三者関係における相互交流を検討する際に重要となるのは、風景構成法におけるやりとりの中で本来多義的である描画に『意味付与』がもたらされる (皆藤, 1998) という点である。素描過程において各項目を提示することは、見守り手が各項目に対して「どのようなあなたのイメージや意味を付与しますか」という問いを含みつつ関与することであり、描き手はその問いに答える形で自身のイメージや意味を付与していく。素描過程ではそれが繰り返されるが、素描された風景の意味やイメージはまだ可能性に開かれており、例えば、「川」の素描にお

^{vi} 本論文において、相互交流を mutual process と英訳したが、これは Spiegelman, J.M. (1985 町沢訳 1994) の「相互のプロセス (Mutual process)」より援用した。転移関係においては、無意識を人間関係など水平方向で引き受けるものと、個人内において垂直方向で引き受けるものがあり、相互のプロセスはそれらが同時に生じ、参加者がお互いに影響を与え合うことを指すものである。

いては位置や幅などのイメージ以外に、水量や深さ、流れなどのイメージの内実については余地を残している。彩色過程においては、描き手と風景が主体となることで、見守り手から逐次提示され素描した項目や風景に対して自身の風景イメージなどと相互交流をするなかで「この川のイメージはこうである」と、より明確化して答えることになる。その時に至ってようやく見守り手にも「ああ、この川のイメージはこうなのか」と明確化され、再び見守り手の相互交流への方向性が開けてくるのではないだろうか。一方では、余白がそのまま残されることがあるが、松井（2009a）が「描き手が触れない場所であると同時に、描き手と見守り手にとって、様々なイメージをそこに投げかけることのできる場所であるとも捉えられる」とするように、余白部分に関してもそのイメージや意味の交錯による相互交流が生じている可能性を考えることができる。このように、彩色過程においては、描き手と見守り手との間においてことばによるやりとりがないため、現象としては相互交流が生じているようには見えないが、この「意味付与」や「明確化」ということを巡る内的な相互交流はむしろ活性化しており、この部分が心理療法的な側面を担う機能の一つとして重要なのではないだろうか。

そして、風景構成法のプロセスにおけるやりとりの構造的変化という点を考慮すると、彩色過程における三者間の相互交流では、「イメージや意味の交錯（皆藤，1998）」は描き手が主体となって風景と相互交流することによって生じ、描き手と見守り手双方において、より「自身の深み（古川，2015）」へ向かう方向性が強く働くようになっている。そこでは、描き手、見守り手ともに自身の内界の深層へと向かう体験をしているのではないと思われる。そして、彩色過程において、お互いに賦活されるイメージは常に風景との相互交流を繰り返し、その中で描き手が風景として表現するイメージや意味は彩色することによってより明確化される。ここでは、描き手と見守り手それぞれの風景に対する相互交流が交錯するような形で、描き手と見守り手との間に相互交流が生じていると考えられる。つまり、描き手、見守り手にはそれぞれに風景との相互交流が生じるが、さらに、そのそれぞれの相互交流に対しても、描き手と見守り手双方から相互に交流が生じ、影響を及ぼし合っているのではないだろうか。描き手の視点からは、見守り手が項目を逐次提示することは問いをもって風景に関わることであり一種の交流と言えるが、その交流に対して彩色過程では彩色行為で自身のイメージを答えることによって、見守り手と風景の交流を、描き手が内的に引き受ける形で関わりを行うことになる。例えば、“この色ではないな”や“もっとこの色が欲しい”などの感覚であろう。また、見守り手の視点からは、描き手が風景に彩色を施す過程を見守ることによって、その交流を内的に引き受けながら関わっていく。例えば、見守り手が彩色を施す様子を見ていて、ふと“ああ、その色だな”と納得する感覚や、“塗る力が強いが大丈夫か…”と心配する感覚が湧き上がることがあるだろう。これら描き手と見守り手双方に生じる感覚自体は意識的なものとも言えるが、そこに至るまでに双方には、それぞれの相互交流に対して、より無意識的な交流が生じており、そのことがこうした感覚を生む素地となっていると考えられるのではないだろうか。無論、このような描き手と見守り手との間の相互交流は常に合致して進むわけではなく、それらの間には必ずズレがある。しかし、こうしたズレを孕みつつ、それぞれが風景に相互的に関わり合うことは、それぞれの相互交流に影響を及ぼし合い、それによってさらに相互交流が活性化するとと思われる。

それに加えて、彩色過程において自身の深みや内的な相互交流へと向かう方向性は、それに至るまでのプロセス、すなわち風景構成法の導入から枠づけ、素描過程を経た描き手と見守り手の関係に支えられていると言える。ここで再び、皆藤（1998）の記述を少し長くなるが引用したい。「クライアントが自由描画に入るまでに、いくつかのことばが交わされた。けれども、現象としての沈黙状況はほとんど変わっていない。とくに、クライアントが描き始めてからは、まったくことばのない世界である。しかし、クライアントの描画活動が沈黙の質を変容させたことは、疑いない。重苦しい沈黙が、描画活動をとおして癒しに繋がる創造的な沈黙へと少しずつ変容していった。・・・ここで、共同存在としてのクライアントと心理療法家という体験を可能ならしめる媒体として描画があったと言えるのではなかろうか。描画によって、イメージの深層へと関係性が下降していったと考えられる。」この記述は、風景構成法導入とその拒否を巡るやりとりがそれまでの重苦しい沈黙を「創造的な沈黙」へと変容させたプロセスを記したものである。風景構成法を巡ってことばによるやりとりが交わされた後、自由描画によって描画空間が創造的な空間となり、ことばのない世界が「創造的な沈黙」となったことが考察されている。これは風景構成法のプロセスに関しても貴重な示唆に富むと思われる。細かな点について異なる側面はあるものの、風景構成法プロセスにおいてもこれに似た状況がある。すなわち、風景構成法の素描過程でのことばによるやりとりを経た後、彩色過程において描き手が沈黙の中で画用紙に向かい、ことばのない世界においてイメージや意味の交錯を体験するというものである。このことは彩色過程において「創造的な沈黙」に近いことが生じる可能性を示していると言えるのではないだろうか。無論、彩色過程において必ずしも「創造的な沈黙」が訪れるとは限らない。しかし、風景構成法はそれを生み出す可能性を、素描過程におけることばによるやりとりを不可欠なものとしつつ、そのプロセスに内包していると言えるのではないだろうか。一方で、そこでは「無意識的なつながり（角野，2002）」のような、ことばの次元とは異なる次元における描き手と見守り手との関係が形成されることによって支えられている。そのことが一種の表現を保護する役割を果たしていると考えられる。中井（2013）が見守り手は「患者を何かから守っているのかも知れない」と述べるように、関係が守りとして機能することによってこそ、その相互交流が可能となると言えるだろう。すなわち、描き手は図2の点線の動きが活性化すると同時に、見守り手は画用紙や描き手への点線の動きを想定することが可能と思われる。その際には、図1の（d）、あるいは図2の相互の深い転移における関係を守りとしていられる。角野（2004）の彩色過程において見守り手が不在にしたことで風景がそれまでとは全く異なるものとなり、その後病状が悪化した例からも、描き手と見守り手との関係が守りとして機能しつつ、彩色過程では、内的かつ無意識的な方向へ下降した地点において相互交流が行われている可能性が示唆される。

したがって、彩色過程においては、それまでのことばによるやりとりによって関係がイメージの深層へ下降することと絡み合いながら、描き手と見守り手それぞれが内的に自身の深みへと向かっており、ことばとは異なる次元において、その関係を一種の守りとしつつ相互交流が生じている。このことは、相互交流という視点から見ると、風景構成法が彩色過程において、その心理療法的な機能をもっとも働かせる過程となっていることを示していると言えるのではないだろうか。

7. おわりに

これまで風景構成法の心理療法的側面の鍵概念となるやりとりについて検討し、これまで注目されて来なかった彩色過程について「相互交流」という語を用いて、その心理療法的側面の可能性について検討を試みた。そして、風景構成法プロセスにおいて、彩色過程は描き手と見守り手の関係を一種の守りとしながら、それぞれが自身の内界と交流するという心理療法的な側面が強調される過程である可能性が示唆された。しかし、本論文では彩色過程における表現や、彩色過程の後のPDIをどのように捉えるかという点など、未検討な部分も多い。なお、本論文で述べたことについては今後、実証的研究が求められるところではあるが、彩色過程が調査研究に馴染みにくい性質上、その方法については十分な検討が必要だろう。一つには風景構成法のやりとりやプロセスについて描き手自身、見守り手自身のそれぞれの観点からの体験を検討することはきわめて貴重な資料となると思われる。風景構成法は描き手と見守り手との関係の下で生み出されるものであり、そのやりとりは最大の特徴の一つとして心理療法的な側面を大いに担っている。そのやりとりの中で、彩色過程は特異な過程であり、その相互交流は心理療法的な意義を十分に持つ重要な過程であると考えられる。そのため、今後さらなる検討を加えていくことが求められると言えるだろう。

筆者は彩色過程が素描過程よりも重要だということを言いたいのではない。彩色過程は素描過程を描き手と見守り手が共にすることで訪れる過程であり、素描過程において表現されること、そしてやりとりされることの大切さを理解しているつもりである。その上で、彩色過程に内包されている心理療法的な機能の可能性や、その表現、そしてプロセスにおける体験について検討する必要性があることを強調したいと考えていることを最後に付け加えておきたい。

謝辞：本論文の執筆にあたり、ご指導いただきました皆藤章先生に心より感謝申し上げます。

8. 引用文献

- 古川裕之（2015）．心理療法としての風景構成法—その基礎に還る．創元社．
- 伊集院清一（2013）．風景構成法「枠組」のなかの心象．金剛出版．
- 角野善宏（2002）．病院臨床における風景構成法の実践．皆藤 章・川寄克哲（編）風景構成法の事例と展開—心理臨床の体験知．誠信書房，pp.94-118．
- 角野善宏（2004）．描画療法から観たところの世界—統合失調症の事例を中心に．日本評論社．
- 皆藤 章（1988）．一枚の風景構成法から．山中康裕・斎藤久美子（編）河合隼雄教授還暦記念論文集 臨床的知の探求（下）．創元社，pp.217-232．
- 皆藤 章（1994）．風景構成法—その基礎と実践—．誠信書房．
- 皆藤 章（1998）．生きる心理療法と教育—臨床教育学の視座から．誠信書房．
- 皆藤 章（2004）．風景構成法の具体と心理臨床．皆藤 章（編著）風景構成法のときと語り．誠信書房，pp.25-52．
- 皆藤 章・中桐万里子（2004）．風景構成法体験の語り．皆藤 章（編著）風景構成法のときと語り．誠信書房，pp.53-91．
- 皆藤 章（2009）．風景構成法の臨床を巡って．皆藤 章（編）現代のエスプリ 風景構成法の

- 臨床. 至文堂, pp.5-22.
- 河合隼雄 (1984). 風景構成法について. 山中康裕 (編) 風景構成法その後の発展. 岩崎学術出版社, pp.245-259.
- 岸本寛史 (2013). ストーリーとしての風景構成法. 岸本寛史・山 愛美 (編) 臨床風景構成法ー臨床と研究のための見方・入り方. 誠信書房, pp.3-24.
- 清重英矩 (2015). 風景構成法における彩色過程についてー先行研究から見えてきた新たな視点ー. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, **19**, 102-112.
- 近藤孝司 (2016). 描画法の描画過程における主観的体験の検討ーバウム法, S-HTPP 法, 風景構成法の描画過程の比較ー. 上越教育大学研究紀要, **35**, 135-146.
- 松井華子 (2009a). 風景構成法における彩色過程. 皆藤 章 (編) 現代のエスプリ 風景構成法の臨床. 至文堂, pp.120-128.
- 松井華子 (2009b). 風景構成法の彩色過程研究の可能性について. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **55**, 215-225.
- 松井律子 (1996). 風景構成法の読み方. 山中康裕 (編) 風景構成法その後の発展. 岩崎学術出版社, pp.27-42.
- 村松知子 (2004). 風景構成法体験がもたらしたもの. 皆藤 章 (編著) 風景構成法のとくと語り. 誠信書房, pp.92-121.
- 中井久夫 (1894a). 描画をとおしてみた精神障害者. 中井久夫著作集第1巻 分裂病 岩崎学術出版社, pp.17-45.
- 中井久夫 (1984b). 精神分裂病者の言語と絵画. 中井久夫著作集第1巻 分裂病 岩崎学術出版社, pp.1-15.
- 中井久夫 (1985). 相互限界吟味法を加味したスクイッグル法. 中井久夫著作集第2巻 治療 岩崎学術出版社, pp.236-245.
- 中井久夫 (1996). 風景構成法. 山中康裕 (編) 風景構成法その後の発展. 岩崎学術出版社, pp.3-26.
- 中井久夫 (2013). 統合失調症の有為転変. みすず書房.
- Spiegelman, J. M. (1985). The potentials of Active Imagination – Part I . Nymphomaniac, Falcon Press.
- (町沢静夫 (訳) 能動的想像法の力と限界 (I). シュピーゲルマン・河合隼雄 (1994). 町沢静夫・森 文彦 (訳) 能動的想像法ー内なる魂との対話. 創元社, pp.35-54.)
- 高石恭子 (1996). 風景構成法における構成型の検討. 山中康裕 (編) 風景構成法その後の発展. 岩崎学術出版社, pp.239-264.
- 運上司子・橘 玲子・長谷川早苗・中村協子 (2010). 風景構成法における彩色についての考察. 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, **4**, 19-23.

(臨床心理実践学講座 博士後期課程1回生)

(受稿 2017 年 8 月 30 日、改稿 2017 年 11 月 20 日、受理 2017 年 12 月 20 日)

風景構成法の彩色過程における心理療法的側面について

—やりとりの視点から—

清重 英矩

本論文は、風景構成法の彩色過程における心理療法的側面について、鍵となる概念であるやりとり（interaction）に着目し、やりとりを担う描き手、見守り手、風景の三者関係における構造的特徴という点から風景構成法プロセス全体を検討した。そして、中でもやりとりの構造的特徴の変化が生じる彩色過程に注目し、その心理療法的な側面についての検討を試みた。彩色過程では描き手と風景の関係が主体となって交流が進む中で、見守り手と風景や描き手と見守り手の間に内的な交流が活性化し、それらが互いに影響し合う「相互交流 mutual process」が生じていることが示唆された。同時に、それは素描過程におけるやりとりによって形成された描き手と見守り手の関係を一種の守りとすることによって可能となっていることを論じた。そして、彩色過程における相互交流が、風景構成法の心理療法的な側面を十分に担う可能性が示唆され、彩色過程の重要性が示された。

On Psychotherapeutic aspect in the Painting Process of Landscape Montage Technique: From the Viewpoint of Interaction

KIYOSHIGE Hidenori

The Landscape Montage Technique (LMT) is an art therapy technique that is widely used in psychotherapy. This paper considers the whole process of LMT, focusing on the “interaction,” which is the key concept in the psychotherapeutic aspect of LMT, from the viewpoint of the structural characteristics of the “interaction” in the relationships between client, therapist, and drawing. In particular, the painting process differs from other processes of LMT in the structural characteristics of the “interaction.” Then, the psychotherapeutic aspect of the painting process is considered. In the painting process, it is suggested that, while the interaction between client and drawing is centered on, simultaneously there is the “mutual process” between client, therapist, and drawing, in which they influence each other in deeper layers of images. In addition, it is argued that the relationship formed by the “interaction” in previous processes of LMT acts as a kind of defense in the painting process. Therefore, it is suggested that the “mutual process” of the painting process accepts its psychotherapeutic aspect, and LMT has a mechanism where psychotherapeutic function works the most in the painting process.

キーワード：風景構成法，彩色過程，やりとり，相互交流，心理療法

Keywords: Landscape Montage Technique, the painting process, interaction, mutual process, psychotherapy